

ティーチング・ポートフォリオ

学科：幼児教育学科 氏名：竹内 啓

(記入日：2021年 8月26日)

1 教育の責任（何をやっているか：担当科目）

保育内容の理解と方法（造形）、幼児造形指導法、日本文化実技V(1),(2)

2 理念（なぜやっているか：教育目標）

将来、保育者になる学生がまず自分の五感で感じたことを大切にし、そこから自ら発想し考えて表現や行動ができるようにする。そして子どもたちが表現を楽しめる出来事に出会える機会を作ったり援助できるように導き支える。

3 方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

実際に自分の目で観察し発見したものを大切にし、自信を持って表現できるよう一人一人の状況に合わせて丁寧にアドバイスしていく。

4 成果（どうだったか：結果と評価）

授業内で一人一人の状況に合わせて指導していくと時間がかかるが、苦手意識が強かった学生が自分の表現に自信を持つようになってきている。

5 今後の目標（これからどうするか）

まだ自分で発想するよりも安易にすでにある例を真似する学生がいるため一人一人の学生へのアドバイスの回数を増やして自信を持たせるとともに、他の学生がどのようにやっているかを紹介し互いにアイデアのヒントを与えたり、やる気を盛り上げるようにする。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

- ・製作した作品を集めた「スケッチブック」
- ・学生が記入した授業の「振り返り」

ティーチング・ポートフォリオ

幼児教育学科 菅井洋子

(記入日：2022年2月22日)

1 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)

保育士資格と幼稚園教諭一種免許状取得をめざす保育者養成学科へ所属しており、以下の「資格や免許取得にかかわる科目」及び「学科科目」を担当している。

〈資格・免許関連科目〉

- 「保育の心理学 (前期、1年次、必修科目、講義)」
- 「子どもの理解と援助 Aクラス」(前期、2年次、選択必修科目、演習)」
- 「言葉」(前期、2年次、必修科目、講義)
- 「保育内容言葉の指導法 Aクラス」(後期、2年次、必修科目、演習)
- 「保育内容言葉の指導法 Bクラス」(後期、2年次、必修科目、演習)
- 「子どもの理解と援助 Bクラス」(後期、3年次、選択必修科目、演習)
- 「保育内容総論」(後期、1年次、必修科目、講義)
- 「保育実習演習Ⅰ (事前事後指導) B」(後期、2年次、必修科目、演習)
- 「保育実習Ⅰ」(後期、2年次、必修科目、実習)
- 「保育実習演習Ⅲ (事前事後指導)」(通年、3年次、必修科目、演習)
- 「保育実習Ⅲ」(通年、3年次、必修科目、実習)

〈学科科目〉

- 「幼児教育体験学習 (通年、1年次、必修科目、演習)」
- 「幼児教育演習 (通年、3年生、必修科目、演習)」

2 理念 (なぜやっているか：教育目標)

本学科がめざす保育者像や学科の特性をふまえ、専門的 (学問的) 知識に触れながら、保育・幼児教育における具体的な事例等をもとに人の発達や子ども理解を深め、とくに「子どもの視点」から保育者の役割や援助、環境構成等を考え、意味を深く理解し主体的に行動できるようになることを理念・教育目標として教育活動を行っている。

3 方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)

学科内の「4年間の学びの流れ」や「各学年で学ぶ内容」、「保育実習・幼稚園実習」をもとに担当授業科目を位置づけ、授業間のつながりを考慮し関連づけ、他の授業とも連携しながら学生の学びが深まるように工夫した (以下に今年度工夫した

授業例をいくつか述べることにする、下線科目が担当科目)。

例) 1年次「保育の心理学」 (乳幼児の発達) と 2年次「子どもの理解と援助」 (子どもの実体験と発達に応じた援助等) → 2年・3年次保育実習Ⅰ・Ⅲ

例) 1年次前期「保育の心理学」 (身体・運動・知覚・言語の発達等) と 1年次通年「幼児教育体験学習」 (科学博物館見学での子ども体験からの学び、附属保育園での保育体験)
→ 保育実習・幼稚園教育実習

例) 1年次前期「保育原理」「保育の内容と方法 (児童文化)」「保育の心理学」と 1年次通年「幼児教育体験学習(附属保育園の子どもたちと大学の学生たちとのオンライン交流)」
→ 保育実習・幼稚園教育実習

コロナの影響により子どもたちとのふれあいを中止するのではなく、いまできることを学生達とともに探りながら、オンラインで園と大学をつなぎ、園の子どもたちと大学の学生達がふれあうオンライン交流を実施した。授業間の連携のもとに、学んだことをふまえて実践できるように計画した。学生達にとっては、グループで考えたオリジナルストーリーの文化財を作成し、練習し、遠隔で演じることの難しさを感じながらも子どもたちにどのように伝えることができるかを考え、画面上での子どもたちとの関わりの中にも子どもたちの声や姿から子ども理解を深める機会となったようで、今後の学びにつなげていきたい等の記述がなされていた。本実践は来年度保育学会において発表する。

例) 2年次後期「保育実習演習Ⅰ事前事後指導」と「保育内容言葉の指導法」→「保育実習」

今年度2年次学生は、昨年度1年次の時コロナの影響により附属保育園の子どもたちとの交流機会がなかったが、2年次2月に保育現場で実習する前に子どもたちの姿を観察しふれあうことが必須であることから、コロナがおちつき対面授業が可能となった2年次後期に「保育実習演習Ⅰ事前事後指導」と「保育内容言葉の指導法」との連携のもとに、指導案の立案・実践・振り返りを実施し学びを深め実践力を養うこととした。「保育内容言葉の指導法」では、園で絵本を読む等実践した自分達の姿を録画した「録画映像による振り返り」を実施し、グループ・個人での振り返りのもとに保育のPDCAサイクルを経験しながら保育実習への準備を実践的に進め、学生達の具体的な理解を深める試みを行った。

例) 2年次後期「保育内容健康の指導法」「保育内容表現の指導法」「保育内容言葉の指導法」
と2年次後期「保育実習演習Ⅰ事前事後指導」→2年次の保育実習Ⅰと3年次の保育実習Ⅲへ

2年次後期に自ら指導案を作成し模擬保育を実践する授業が重なっているため、保育内容指導法を担当する学科教員で内容を検討し、保育実習演習Ⅰ事前事後指導と調整しながら実施する際の学生のグループメンバーや日時を決定した。また、2年次2月の「保

育実習Ⅰ」のみならず3年次9月の「保育実習Ⅲ」をも見通した模擬保育を実施し、応用する力を養うこともめざし工夫した。

例) 担当科目において、授業形態(オンライン双方型、対面授業)に応じた学生達と教員とのやりとりや他の学生の考えを知るための工夫等を考え実践した(Microsoft Teams 上でのチャット、画像共有等)

等

また、保育者になるための力を養うためには、多様な「人」と関わり協働しあうこと、そして様々な「道具や方法」を用いて活動すること等が必要である。そこで、授業内で複数の学生達が関わり協力しあうアクティブラーニングやICT活用の機会を設けている。パソコンやiPad、カメラ、子ども体験キット(視野メガネ)等の道具を実際に活用し、気づいたことや考えたことを伝え合い、表現する方法としてデジタル媒体や紙媒体を用いて発表する等、授業内容とともにこれらを意図的に導入する工夫をしている。

さらに新型コロナウイルス感染症の影響により、授業形態(オンライン授業、対面授業)も時期により異なる1年であった。オンライン授業時にはとくに双方向型授業を実施し、学生たちとのリアルなやりとりができるように工夫した。

4 成果(どうだったか:結果と評価)

学生自身が授業間のつながりに気づくとより理解が深まり、実際に体験し活動することにより多様な気づきがみられより興味関心をもつようになり、主体的に考え行動することや意味を深く知ることが楽しみにつながり、他者の考えを知る機会が多面的に捉えることにつながりおもしろさを感じるようになる等が、学生の振り返り記述(コミュニケーションシート、Formsの記述等)や授業評価アンケートの自由記述欄に記されていた。

授業への参加方法や資料作成等の経験は、学生により差がみられ、学生の現状を確認しながら多様な道具や方法に触れることができるように検討していく必要があることが判明した。

5 今後の目標(これからどうするか)

来年度は、1年次から4年次まで全学年新カリキュラム対応の授業科目・内容となる。新カリキュラムでの授業を4年間に位置づけ、連続性を考えながら、保育者に求められている力を養えるよう授業内容や方法、学科教員間での連携等を検討し実施していきたい。

グループでの授業時間外学修活動が、他の教員と重なってしまうことを考慮し、

授業外学修時間の内容や形態も教員間で調整し連携していきたいと考えている。

また新型コロナウイルス感染症により大学の授業のみならず実習等もこれまでとは変わってきていることもある。学生たちにとっては、感染予防をしながらも子どもたちと実際に関わり、保育現場に行くことにより学ぶことが多く、成長していく上でのこれらの体験・経験の重要性を痛感する1年であった。そのことをふまえて授業での実践の際にも最大限の感染対策のもとにさまざまな工夫を考え実践した。今後さらに保育現場における新型コロナウイルス感染症への対策や取り組み、ICT機器活用等について学生とともに学び考えながら、学生が保育者をめざし多様な力をつけていけるように大学内においてできることを模索しながら、取り組んでいきたいと考えている。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

1. 授業毎に学生が記述する「コミュニケーションシート」(紙・Forms) (未公開)
2. 学生による授業評価アンケート
3. テキスト

菅井洋子「第2部 保育内容言葉の指導法:子どもから考える・子どものために考える、第6章 乳児保育における言葉を育む保育実践(p95-111)」、『子どもの姿からはじめる領域「言葉」』、株式会社みらい、令和2年

菅井洋子「第3章 メディアとともにいきるとは?:メディアからの学びを考える(p30-45)」、『子どもの育ちを考える教育心理学:人間理解にもとづく保育・教育実践』、朝倉書店、令和3年

等

以上

ティーチングポートフォリオ

幼児教育学科 古山 律子

(記入日：2021年9月24日)

1. 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)

学科の専門教育科目(必修)、幼稚園教諭一種免許状および保育士資格取得に係る専門教育科目等を担当している。保育者(幼稚園教諭、保育教諭、保育士)養成における音楽表現全般に関する教育を担当している。

【免許・資格に係る科目】

「保育内容の理解と方法(音楽)」(1年次 通年 保育士必修・教職選択必修科目 2単位 演習)
「幼児音楽指導法」(3,4年次 後期 保育士・教職選択必修科目 2単位 演習)
「子どもと音楽」(3,4年次 前期 保育士・教職選択必修科目 2単位 演習)
「保育内容表現の指導法」(2年次 後期 保育士・教職必修科目 2単位 演習)
「保育内容表現の指導法」(4年次 前期 保育士・教職必修科目 2単位 演習)
「実習訪問」

【学科科目】

「ピアノ演習」統括(2年次 通年 学科の独自科目 2単位 演習)
「弾き歌い演習」統括(3年次 通年 学科の独自科目 2単位 演習)
「幼児教育体験学習」(1年次 通年 必修科目 2単位 演習)
「卒業研究」(4年次 通年 必修科目 2単位 演習)

2. 理念 (なぜやっているか：教育目標)

本学科が掲げる「子どもと共に生きることができる自覚ある保育者」「すべてのく人・もの・こと>に感謝できる保育者」を育成することを目指し、教育を行っている。保育者養成における音楽表現教育に携わるなかで、「みずみずしい感性と豊かな表現力を兼ね備えた幼稚園教諭・保育士となる人材を育成する」ことを目標としている。専門的知識、実践的スキル習得のために、学生が主体となる演習を実施している。

3. 方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)

専門的知識、実践的スキル習得のために、学生が主体となる演習、理論的背景と実践を両輪で捉える演習を実施している。

「保育内容の理解と方法(音楽)」(1年次 通年 保育士必修・教職選択必修科目 2単位 演習)では、子どもの音楽表現に関する理解を深めるために保育内容の領域「表現」の専門的事項である音楽表現に関するテキスト『コンパス音楽表現』建帛社(2020年4月発行)を今年度も採用した。新要領・指針に対応する学修内容を確認し、教育の質を上げていくことを実践している。ピアノ・歌唱の実技指導に関しては、今年度前期は対面授業が可能となったため、新型コロナウイルス感染症の拡大防止に関する対策(手指の消毒、飛沫防止シートの使用、楽器の管

理等)を徹底して行った。感染対策に鑑みクラスを少人数編成としたため、細やかな実技指導を行うことができ、学生の意欲向上につながった。

「保育内容表現の指導法」(4年次旧カリ保育士・教職選択必修科目2単位 演習)においては、ペアワーク・グループワークによるサウンドマップやドキュメンテーションの作成を通じて、体験に基づいた最新の知見の解説を行うことができた。途中遠隔授業となったものの、テキストを活用しながら、理論的基盤と実践力の向上を目指した。

「子どもと音楽」3,4年次 前期 保育士・教職選択必修科目2単位 演習)においては、音楽的発達の理解の促進、乳幼児を取り巻く音環境への関心拡大につながるよう、教育上不可欠として対面にて実施した。受講生は実技の習得にも積極的に取り組み、双方向型学習による実技発表を実施するなど、主体的・対話的となる授業実践を工夫し、学生の理解力、実践力向上に役立てた。

「卒業研究」(4年次 通年 必修科目4単位 演習)では、オンラインを活用しつつ個別指導の充実を図り、問題把握力・考察力の向上を目指した。

4. 成果 (どうだったか: 結果と評価)

「保育内容の理解と方法 (音楽)」では、実技や音楽理論の基礎の習得に成果がみられた。(エビデンス1)。「子どもと音楽」では、実技と理論的背景の連環が学生のポートフォリオの記述にも多くみられるようになり、意欲・理解力・実践力が向上した (エビデンス2)。「保育内容表現の指導法」では、グループワーク、国内外の表現教育の紹介、4歳児の表現に関する短い動画視聴等を通じて、保育内容領域表現のへの理解の深まりが記録されている(エビデンス3)。

5. 今後の目標 (これからどうするか)

「保育内容表現の指導法」において、教職・保育士必修科目を担当している。音楽教育に限らず、幅広く乳幼児の表現を捉える重要な科目であり、新要領・指針に対応する学修内容を再確認し、創造性をキーワードに後期授業の展開・工夫につなげていきたい。

6. エビデンスとなるもの (資料の種類などの名称)

- 1 学生の授業内ポートフォリオ (非公開)
- 2 学生の授業内ポートフォリオ (非公開)
テキスト『乳幼児の音楽表現』
- 3 学生の授業内レポート (非公開)

ティーチング・ポートフォリオ

学科：幼児教育学科 氏名：中山佳寿子

(記入日：2022年 2月 24日)

1 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)

哲学／哲学(1) 共通科目 (史・心・日・幼・児・生、2単位)

教育実習演習(事前・事後指導) <3年次生用> 1単位

教育実習 <3年次生用>

教職センター勤務 (火曜日 2限、金曜日 2限、3限、4限)

2 理念 (なぜやっているか：教育目標)

学生が将来、保育者になった時に、目の前の子どもの姿を受けとめ自ら保育を構想できるように、感受性及び思考力、実践力を高めるために教育を行なう。

「子どもと共に生きることができる自覚ある保育者」、「全ての<ひと・もの・こと>に感謝できる保育者」となれるよう援助、指導する。

3 方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)

「哲学／哲学(1)」では、学生の思考力を高めるために、哲学者の思想と哲学概念を噛み砕いた言葉で解説した後に、学生自身が印象に残った言葉を一つ選んで近くの席の友だちにスケッチブックを使用した発表を行なった。意見の共有には、Teamでformsを配信して意見を集め、授業内で共有し学生同士が互いに刺激し合えるようにした。また最終課題は哲学概念を用いた絵本を作成・提出することとした。

4 成果 (どうだったか：結果と評価)

特にハンナ・アーレントの『全体主義の起源』やブルデューの『ディスタンクシオン』については反応が大きかった。formsを使用した意見の共有によって学生同士が互いの意見によって高められ、次の授業ではさらに充実した文章をまとめることが出来るようになっていた。学生からは「抽象的な概念を自分の問題に引き寄せて捉えられた」「友だちの意見に触発された」という感想がコメ

ントシートで寄せられた。スケッチブックを使用したグループワーク（意見の交換）、他者との相違点を明確にしたうえで討議に臨むという姿勢を身に付けることが出来た。そのことは、ミニレポートの文章や、最終課題の「哲学絵本」に表れた考察で確認できた。しかし、コロナの感染防止の観点から、15分を超えたグループワークは行うことが出来なかった。数回はオンライン授業にすれば、グループディスカッションをマスクなし・長時間行うことが出来たと考えられる。

5 今後の目標（これからどうするか）

今期は、授業のねらいとして、授業で理解した概念を用いて発表すること、他者と自分の意見の相違点に着目して思考をめぐらすこと、の二つを主眼とした。今後は後者の他者と自分の意見の相違点に着目して、議論を展開すること、議論する際のマナーやルールを身につけること、も目標としたい。そのためにはグループディスカッションやグループ発表の時間をもっと増やすことが重要である。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

①授業ごとに配布したスライド ②授業ごとに配布した課題 ③学生による授業評価アンケート ④最終授業で学生が提出したスケッチブック